

「戦時下における児童文化」について（その一二）

——「少國民新聞」（東日版）における読者投稿作品の位相と展開（一）——

熊 木 哲

前稿（「戦時下における児童文化」について（その一一））（「大妻女子大学紀要・文系」第三十九号、平成十九年（二〇〇七）三月）までは、「東日小学生新聞」に掲載された読者の投稿作品について検討してきたが、「東日小学生新聞」が「少國民新聞」（東日版）と改題されたことに連動して、副題を変更した。以下、本稿では、「少國民新聞」は「少國民新聞」（東日版）をいう。

「少國民新聞」への改題は、「小学校が明春から国民学校となるので、それに応じてわが東日小学生新聞も『少國民新聞』と改題することになりました」（「東日小学生新聞」昭和十五年十二月十二日）というものの。

「尋常小学校」が「国民学校」になるのは、十六年四月からであったが、「東日小学生新聞」は、元旦から改題し「少國民新聞」となった。

以下、本稿では、昭和十六年の「綴方」を四半期毎に検討する。引用に際しては、原則として、旧字体を新字体に改めた。

なお、「前稿」同様、作者については、在籍校名・在学年・性別を記すにとどめた。在学年次のうち「高一」「高二」は高等科一年、二年を示すのは「前稿」同様。

一 昭和十六年の「綴方」作品の展開

「少國民新聞」に改題された昭和十六年には、「東日小学生新聞」では設定されていた「紙上作品展覧会」あるいは「紙上作品展」の紙面構成は、見られなかった。

昭和十六年の検討対象は、一月一日（水・第一三三三号）から十二月三十一日（水・第一六四一号）までの、休刊日を除いた三〇九日分であるが、国会図書館蔵「少國民新聞」は、一月二十二日（水、第一三四九号）のマイクロフィルムが「欠」であり、検討対象は三〇八日分であった。

この間の掲載状態は、原則として、「東日小学生新聞」と同様、毎週月曜日が休刊日であり、火曜日から日曜日まで、「綴方」「詩」「短文」「俳句」「書方」「図画」の総てか、或いは、その一部が掲載されていた。

紙面構成も、「東日小学生新聞」と同様、平日・土曜日が四面、日曜日が八面構成であったが、第四四半期になると、「お国への御奉公」（十月七日）のため、用紙を節約するところとなり、十月九日から週一回（木）、十一月五日から週二回（水・金）、十二月九日からは週三

回（火・木・土）が二面構成となった。二面構成では十五日分で作品の掲載は無かった。

昭和十六年、「綴方」の掲載数は二九〇作品。内訳は、第一四半期が七六作品、第二四半期が八七作品、第三四半期が八一作品、第四四半期が四六作品。十五年（三二二日分）は三三三作品であり、二三三作品の減少となった。

掲載された二九〇作品のうち、作品内容に時局柄或は「戦時下」色の見えるのは八九作品（約三〇・七％）。内訳は、第一四半期では七六作品中一六（約二一・一％）、第二四半期では八七作品中二〇（約二二・九％）、第三四半期では八一作品中三一（約三三・三％）、第四四半期では四六作品中二二（四七・八％）。

因みに、十四年第一四半期では七〇作品中八（約一一％）、第二四半期では六三作品中一四（約二二％）、第三四半期では七八作品中八（約一〇％）、第四四半期では六五作品中一四（約二二％）であり、十四年は二七六作品中四四（約一五・九％）。十五年第一四半期では六二作品中一三（約二二％）、第二四半期では七七作品中一四（約一八％）、第三四半期では八二作品中一一作品（約一三％）であった。第四四半期は九二作品中二三作品（二五％）であり、十五年は三三三作品中六一（一九・五％）。

整理すると、次のようになる。

十四年は二七六作品中四四（約一五・九％）。

十五年は三三三作品中六一（一九・五％）。

十六年は二九〇作品中八九作品（約三〇・七％）。

十六年は、掲載作品数では十五年から減少したものの、作品内容に時局柄或は「戦時下」色の見える作品の割合は一〇％以上も増大している。

また、十六年第三四半期では八一作品中三一（約三三・三％）、第四四半期では四六作品中二二（五三・七％）であったが、これは、第三四半期に「支那事变記念綴方優等作品」の掲載が一二作品あったこと

とと、第四四半期に「映画『航空基地』を見て」が五作品、「大東亜戦争と私の覚悟」が八作品掲載されたことによる。「大東亜戦争と私の覚悟」は、十二月八日に開戦となった日米英戦でのキャンペーンであった。

なお、十六年一年間に、複数の作品が掲載された児童は、最多の九作品が一名、六作品が一名、五作品が二名、四作品が一名、三作品が三名、二作品が二名であった。

二 昭和十六年第一四半期における「綴方」

第一四半期に掲載された「綴方」は七六作品。この内、作品内容に時局柄或は「戦時下」色の見えるのは、次の一六作品であり、掲載作品に占める割合（以下、掲載率という）は約二一・一％となる。

「しかられた夜」（埼玉県大沢校四年男子、一月五日・日、第一三三五号）

「おくぼり」（山梨県神山校二年男子、一月十日・金、第一三三九号）

「兄さんの思出」

（福島県伊北校六年女子、一月十二日・日、第一三四一号）

「僕の飛行機」（秋田県小坂校六年男子、一月十六日・木、第一三四四号）

「兵隊さん」

（神奈川県横浜市浜町校三年男子、一月十八日・土、第一三四六号）

「慰問袋」

（東京市渋谷区大和田校四年男子、二月七日・金、第一三六三号）

「家の代用品」

（東京市荒川区尾久西校四年女子、二月十六日・日、第一三七一号）

「少国民新聞」（千葉県那古校高二男子、二月十八日・火、第一三七二号）

「ユキ」（新潟県漆山校一年女子、二月二十五日・火、第一三七八号）

「高射砲」（茨城県日立市駒王校三年男子、三月一日・土、第一三八二号）

「雪の朝」

（東京市中野区中野第三校五年女子、三月五日・水、第一三八五号）

「消しごむ」

（東京市小日向台町校三年男子、三月九日・日、第一三八九号）

「飛行機」

（青森県八戸市八戸校三年男子、三月十四日・金、第一三九三号）

「せん車」

（千葉県大森校二年男子、三月十九日・水、第一三九七号）

「兵隊さん」

（千葉県姉崎校三年女子、三月二十一日・金、第一三九九号）

「食卓を囲んで」

（静岡県熱海校六年女子、三月二十九日・土、第一四〇六号）

「しかられた夜」（埼玉県大沢校四年男子、一月五日）、「ユキ」（新潟県漆山校一年女子、二月二十五日）、「消しごむ」（東京市小日向台町校三年男子、三月九日）、以上、三作品に共通するキーワードは、「非常時」。

「しかられた夜」は、こたつにもぐりこんでいて、着物に火が付いてしまったというもので、「こんな非常時に着物をやくなんて、ばかがあるか」と散々に叱られたという内容。「非常時」という時局意識からの小言である。

「ユキ」は、ママゴト遊びで、雪のお饅頭を友達から買う時、友達が「イマハ ヒジャウジ ダジカラ、タカヒヨ」というもの。一年生のママゴト遊びにまで「ヒジャウジ」が意識されていたということ。

「消しごむ」は、消しゴムをよく無くすため、母から「けしごむは五銭や三銭の物ですが、このひじやう時に、もつたいないことですよ」と諭されたというもの。

「非常時」といった認識が、大人から子供へ教育され、そうした時局の下に児童たちの日常があったということを示す作品といえよう。

「おくばり」（山梨県神山校二年男子、一月十日）は、お赤飯を配るお使いで貰った駄賃を「学校へ持つていつて、貯金をしました」というもの。「貯金」がキーワードだ。

「戦時下における児童文化」について（その一三）

「戸毎村毎愛国貯蓄」或は又「一億一心百億貯蓄」等の目じるしを掲げて進んで来た国民貯蓄奨励運動は、この四月からいよいよその第三年を迎へることとなつた。

「週報」第一八四号（昭和十五年四月二十四日発行）の「新東亜百二十億の貯蓄から」の冒頭部である。この「第三年」昭和十五年度は百二十億円が貯蓄の目標とされ、「第四年」の十六年は百三十五億円が目標とされた（「週報」第二三三三号・昭和十六年三月二十六日）。

日本勸業銀行国民貯蓄奨励部では『小学生と支那事変貯蓄債券』（昭和十五年四月）を、愛国児童協会からは『貯蓄奨励児童優秀集』（昭和十五年十二月）が刊行され、児童を貯蓄へと導いていった。

駄賃を「学校へ持つていつて、貯金をしました」の一節は、一見、自発的な貯金のようにも受取れるが、百二十億円達成への一助であり、学校での、地域子供会での「貯蓄報国」の一端であった。

「兄さんの思出」（福島県伊北校六年女子、一月十二日）、「兵隊さん」（神奈川県横浜浜町校三年男子、一月十八日）、「兵隊さん」（千葉県姉崎校三年女子、三月二十一日）、「慰問袋」（東京市渋谷区大和田校四年男子、二月七日）、以上の四作品に共通するのは、「兵隊さん」。

「兄さんの思出」は、「兄さんが入営されるとき、雨がしよぼく降つてをりました」に始まる作品で、母が涙を流しながら兄さんに「お前はお国にさゝげたからだだから、家の事は心配しないで、はたらいてくれ」と言った。父は兄の荷物を持って見送りにいった。兵士の補充は不断に行われたということ。

神奈川県「兵隊さん」は、写生に行く途中「兵隊さん」に出会い、一緒に行ったというもの。兵隊さんは手に包帯をしていた。戦争での負傷だという。この「兵隊さん」は、写生しているところに同行、うまく描いたら戦場の話をしてくれるといった。「兵隊さん」は、休暇中でもあったのだろうか。

千葉県の「兵隊さん」は、家に兵隊さんが泊まったという内容。

「兵隊さんは皆で三人でした。今日から四日とまるのなさうです」というもので、母は「てんぷらをあげ」、私は「たまご」を買いに行き、「外では庄どんが、おふろをたてる」。演習に来た「兵隊さん」を一家総出で接待するということだ。

「慰問袋」は、「兵隊さん」を慰めるためのもの。児童は、慰問文を父に見てもらってから、慰問袋に入れた。その慰問袋には、わら半紙をとして自分で表紙をつけた陣中日記、苦心して書いた図画、「くわんづめ、ドロツブ、びんせんそのた色々なものが入れてあつた」。

慰問袋作りは、児童に課せられた重要な作業であり、「兵隊さん」を労うことは、同時に、児童もまた戦場と回路を通じることであった。

「僕の飛行機」(秋田県小坂校六年男子、一月十六日)では、模型飛行機と中国大陸の戦場とが意識的には繋がっていたことに注目したい。自分が作った模型飛行機がうまく飛ばないので、支那の飛行機が墜落だと笑われたというもの。手直しでうまく飛び、「重慶爆撃にでも飛んでいく」ような気がしたという内容。「重慶爆撃」は、児童にとつて良く知られた戦果であったのだろう。

「重慶爆撃」は、昭和十三年十二月二十六日から始まった(敵都重慶を反復空襲す)『週報』第一一八号・昭和十四年一月十八日)。「東日小学生新聞」第七一八号(昭和十四年一月十二日第二面)では、「陸の大編隊空軍二度重慶を爆撃」のリードで、重慶への空爆を報じていた。

重慶への本格的な爆撃は、昭和十五年(一九四〇)五月十八日夜に開始された「百一号作戦」であり、五月二十六日以来攻撃日数三二日に達し、「とりわけ、六月二四日から二九日までの六日間は、陸海軍合同で昼夜にわたる記録的な連続爆撃がおこなわれた」(『昭和——二万日の全記録』第五卷・講談社、平成元・一一、以下『昭和5』)。「東日小学生新聞」第一二六〇号(昭和十五年十月八日第二面)は、「海鷲四十一回重慶空襲」のリードで空爆の様子を掲載した。

陸軍の荒鷲、海軍の海鷲によって、重慶は徹底的に爆撃され、その

戦果が次々に新聞で報じられた。「僕の飛行機」に見られるように、「支那」を軽視する風潮が、児童の世界にまで広まっていたということである。

「家の代用品」(東京市荒川区尾久西校四年女子、二月十六日)、「雪の朝」(東京市中野区中野第三校五年女子、三月五日)、この二作品のキーワードは、物資不足の国内状況。

「家の代用品」は、「私の家はほとんど代用品といふ物がないのか、それとも、あんまりありません」という内容。妹の机は、酒の空き箱。私の机は、小さいお膳。妹の洋服箱はカナリヤの巣箱、などなど。

「前稿」でも触れたが、「週報」第二〇四号(昭和十五年九月十一日)では、「進む代用品」を掲載し、代用品への理解を求めた。

代用品は我が日本が力強く国威を伸ばすために、是非解決せねばならぬ原材料の転換の問題なのです。国力を培養するために進んで使はねばならぬものが代用品なのです。止むを得ず使ふといふのでは余りに消極的過ぎます。

投稿児童宅では、代用品といふ物がないのか、それとも、あんまりありません。代用品といふ様な感じがしないのか、と記していた。代用品を使うことは「戦時国民生活の刷新」の一環として求められた国策であった。戦線の拡大に伴って、資源を戦争に集中するために、資源の節約が要請され、代用品の使用が奨励された。資源の再利用も資源の節約であり、時局の要請であった。

「雪の朝」は、降った雪が「お砂糖だつたらどんなにいいだらう。切符制にもならないですむし、大すきなお菓子もいたゞけるし、など思ひながら」学校へ行ったというもの。大都市において砂糖がマッチと共に切符制となったのは、昭和十五年六月。東京は五日からであった。

わが国は戦時下でありながら生産配給の機構の多くが、戦前のまゝになつてゐる関係から、いわゆる売惜しみ、買溜の余地が多分にあり、そのため十分に国民生活を賄へる物があつながら、物資が偏して不足騒ぎすら起したのである。そこで国民生活の安定を図るために生活必需品について方針を決定し、先づ砂糖とマツチとについて切符制を実施することになつたのである。

「週報」第一八九号（昭和十五年五月二十九日）所載の商工省「砂糖とマツチの切符制実施」の一節である。砂糖が不足になつたからではなく、製品の安定流通のためだというが、代用品と切符制は、いよいよ製品の供給と流通に影響が出てきたということである。

「少國民新聞」（千葉県那古校高二男子、二月十八日）で注目するのは、児童が自分たちが働いて得たお金を皆のために使うということ。

「少國民新聞」は、「農業実習や報国農場で得た金で、尋常五年から高等二年まで、少國民新聞を取つてゐます」という内容の作品。農場での実習や地域・学校に設定した「報国農場」での作物が換金され、その成果が共有されていたということになる。

「高射砲」（茨城県日立市駒王校三年男子、三月一日）、「飛行機」（青森県八戸市八戸校三年男子、三月十四日）、「せん車」（千葉県大森校二年男子、三月十九日）、この三作品に共通するものは、いうまでもなく、攻撃用兵器ということ。

「高射砲」は、海岸での高射砲演習を見学した内容。地域住民に、演習が周知され、公開されたということである。児童は、高射砲の発射音のすごさにびっくりしてしまった。

「飛行機」は、「飛行機は銀のつばさに、日の丸じるしをかゞやかして、飛んできた」という作品。皆で「二十一だいま今日は飛んできた。あとで飛んできたのではない。今日も、陸軍の練習機が児童の上に飛んできたのであり、児童は、その数を数えていたということなのである。

「戦時下における児童文化」について（その一三）

「せん車」は、「学校からかへる時、門を出ると、けんだうをせん車が走つて来た」ので、見に行つたというもの。児童は、「あのせん車が、支那でもせんさうしてゐるんだ」と思った。

高射砲が、陸軍の練習機が、戦車が、児童の日常に入り込んでゐる。戦車は「支那」へとつながつてゐる。戦時下は、「支那」から児童の日常へと繋がつてゐるということである。

「食卓を囲んで」（静岡県熱海校六年女子、三月二十九日）のキーワードは「新体制」。夕食に帰ってきた父が「新体制の職分奉公といふのも、自分自分の持場で、全力をあげて働くことなのだ。お前達も学校の勉強を、自分の務めと考へて、お父さんと同じやうに、しつかりやらなくてはいけない」と諭すもの。

「新体制」とは、戦争遂行のために、国内に新体制、すなわち大政翼賛を確立することであり、戦争への一丸を求めることであつた。

昭和十六年第一四半期における「綴方」作品に見る時局柄或は「戦時下」には、兄弟の入営があり、時局柄を「非常時」と認識させられ、自覚を求められる日常であり、その日常には、高射砲が、戦闘機が、戦車が身近に迫り、代用品が、切符制が生活の基盤となつてゐた。

時局柄或は「戦時下」色をまとつた作品は、第一四半期に掲載された「綴方」作品の二〇％を超え、少なくない掲載率であるが、一方、約八割は、児童の日常生活に根ざした作品であつた。

雪国の冬籠りは、格別の味わいがあるとする「冬籠り」（北海道月寒校高二男子）、兄弟で焼き芋をやき、ふうふう冷ましながら食べたという「焼芋」（東京市豊島区仰校六年男子）、焚き火をしたら霜が解けて、足元がぐしゃぐしゃになつてしまつたという「たき火」（東京市荏原区中延校二年女子）など、第一四半期の季節柄の作品である。

朝ごはんを炊いたら焦がしてしまい、涙がこぼれたという「叱られたこと」（秋田県米内沢校六年女子）、妹を負つて友達と遊んだという「昨日のこと」（秋田県神宮寺校二年女子）。家事を手伝い、子守をするなど、児童は、一家を切り盛りする一員でもあつた。

三 昭和十六年第二四半期における「綴方」

第二四半期に掲載された「綴方」は八七作品。この内、作品内容に時局柄或は「戦時下」色に見えるのは、次の二〇作品。掲載率からは約二一・九八%となる。

〔手紙〕 (千葉県大森校二年女子、四月一日・火、第一四〇八号)
 〔兄さんの決心〕 (長野県飯田市上飯田校六年女子、四月十一日・金、第一四一六号)

〔義勇軍の皆様へ〕 (茨城県土浦市真鍋校五年女子、四月十三日・日、第一四一八号)
 〔少年義勇軍〕 (岩手県水沢校五年男子、四月十五日・火、第一四一九号)

〔僕の兄さん〕 (東京市渋谷区渋谷校五年男子、四月十六日・水、第一四二〇号)
 〔お便り〕 (福島県新鶴第一校五年女子、四月十七日・木、第一四二二号)
 〔学校帰りに〕 (長野県保科校高二男子、四月十八日・金、第一四二三号)
 〔輝く開拓義勇軍〕 (静岡県大宮東校六年女子、四月十九日・土、第一四二三号)

〔六年生になつて〕 (東京市大森区東調布第二校六年男子、四月二十日・日、第一四二四号)
 〔神社参拝〕 (北海道恵庭校四年男子、四月二十五日・金、第一四二八号)
 〔陸軍病院慰問〕 (東京市淀橋区明星校五年男子、五月一日・木、第一四三三号)

〔名譽の旗〕 (群馬県師範附属校六年男子、五月二日・金、第一四三四号)
 〔作業の時間〕 (神奈川県川崎市幸町校四年男子、五月七日・水、第一四三八号)

〔雲〕 (神奈川県茅ヶ崎第三校六年女子、五月二十二日・木、第一四五一号)
 〔ツクシンボ〕 (茨城県大生校一年男子、六月三日・火、第一四六一号)

〔春〕 (北海道白瀧校高一女子、六月四日・水、第一四六二号)
 〔蚕〕 (埼玉県深谷校四年男子、六月十一日・水、第一四六八号)
 〔お父さんのお迎え〕 (東京市板橋区板橋第三校五年男子、六月十二日・木、第一四六九号)

〔花晶おこし〕 (北海道上富良野校高一女子、六月二十二日・日、第一四七八号)
 〔父の手伝ひ〕 (静岡県高須校六年男子、六月二十六日・木、第一四八一号)

〔手紙〕 (千葉県大森校二年女子、四月一日)、「陸軍病院慰問」(東京市淀橋区明星校五年男子、五月一日)、「ツクシンボ」(茨城県大生校一年男子、六月三日)、この三作品に共通するものは、傷病兵および兵士への慰問。

〔手紙〕は、「この間手紙をあげた、びやうきの兵たいさんから」手紙が来たというもの。傷病兵への慰問文への返事がきた。「私の書いたぐわも、ほめてくれました」の一節からは、図画も送ったことが分かる。「兵たいさんからの手紙は二つになりました」とあるように、慰問袋は繰り返し作られていった。

〔陸軍病院慰問〕は、題名の通り、陸軍病院への慰問が内容。「上落合少年隊八十名」が、「兵隊さんに舞台を作つて頂いて、舞踊、劇、朗読、歌等力の限り御慰問した」というもの。

〔少国民新聞〕第一四八一号(昭和十六年六月二十六日第二面)は、「白衣の勇士を慰問した日暮子供会員」の見出しで、習志野陸軍病院を、「東京市荒川区日暮里四丁目の日暮子供会」の百三十余名が慰問し、「各病室を廻つて慰問した後、舞踏や唱歌をして慰問しました」との記事を写真付きで掲載した。傷病兵への慰問は、各地で組織された子供会の重要な活動であった。

〔ツクシンボ〕は、慰問文の中に、母が「ウメノ花ト、ツクシンボヲ イレタ」というもの。春を戦地に送りたいとの思いからであろう。

「兄さんの決心」（長野県飯田市上飯田校六年女子、四月十一日）、
「義勇軍の皆様へ」（茨城県土浦市真鍋校五年女子、四月十三日）、
「少年義勇軍」（岩手県水沢校五年男子、四月十五日）、「僕の兄さん」（東
京市渋谷区渋谷校五年男子、四月十六日）、「お便り」（福島県新鶴第
一校五年女子、四月十七日）、「学校帰りに」（長野県保科校高二男子、
四月十八日）、「輝く開拓義勇軍」（静岡県大宮東校六年女子、四月十
九日）、この七作品は、何れも満蒙開拓青少年義勇軍に関するもの。
「兄さんの決心」は、去年「母校を卒業」し、「青少年義勇軍」への
参加を望んでいた兄がようやく「義勇軍」加入のため出発したという
もの。

「義勇軍の皆様へ」以下の六作品は、「少國民新聞」が募集した「義
勇軍慰問の作品」。

赤い夕陽の満洲に、雄々しくも新東亜建設の鋏をふるふ義勇軍
のお兄さんを、慰め励ます為、少國民新聞が全国の皆さんから募
集した綴方、習字、図画は、実におびたゞしい数にのぼりました。

「少國民新聞」第一四一八号（昭和十六年四月十三日第八面）は、
「此の真心を大陸へ」のリードで、最優秀十二名（綴方六名、習字、
図画各三名）を発表した。

「満洲へ行かれてからは、兵隊さんと同じやうに、一生懸命御
国の為、東亜建設の為に働くといふ、其のりつばな精神こそ本当
の大和魂です」。（「義勇軍の皆様へ」）

「沢山の村人達に送られて、出発しようとして居る、三人の少
年義勇軍」を見送りながら、「銃後の日本少年の務めを、十分に
果すこと」を心に誓った。（「少年義勇軍」）。

「戦時下における児童文化」について（その一三）

「僕の兄さんは義勇軍で今ハルピンの特別訓練所第五中隊に居
ます」が、「少し位の困難など戦地の事と思へば、なんでもないと
と手紙が来たこともありました」。「日満両国のために働いて下さ
るのだと思ふと、しぜんに頭が下るやうな気持ちになります」。
（「僕の兄さん」）

「私のお父さんは、一昨年、義勇軍の幹部として、満洲に渡つ
て行かれた」。父から「義勇軍の若い男の人達が、一生けんめい
で働いてをられる様子をきき」、「男に生れなかつたことが、残念
に思はれました」が、父が行っていることで、「私もなんだか、
満洲と手をとり合つてゐる様な氣」がしてうれしい。（「お便り」）

「満洲の義勇軍になつて行きたいな。後取は弟にさせるから」
と両親に嘆願したが、「お前は長男だから、此処にゐてしつかり
と國を護つてゐるのも、満洲へ行つたつもりでやればよい」とい
われ、あきらめて内地にすることにした。（「学校帰りに」）

内原の訓練所入所のため出発する義勇軍を見送つた。町を通る
と、門口に日の丸の旗印の下に、「満蒙開拓義勇軍の家」と鮮や
かに書いた札が掲げてあります。「御苦労様ですと、心の中で御
礼を申し上げて会釈をして通ります」。（「輝く開拓義勇軍」）

「少國民新聞」第一三八八号（昭和十六年三月八日第二面）は、「行
け奥満洲へ」「内原訓練所へ大部隊」のリードで、次のような記事を
掲載した。

拓務省では今、本年度の若い大陸の鋏の戦士満洲開拓青少年義
勇軍を募集してゐますが、六日までに採用ときまつた人数だけで
も、一万七千人にのぼりました。

拓務省の予定では「一万二千六百人」の募集予定であったが、その三割り増しの応募があったことになり、「こんなことは同開拓民募集を始めてから例がありません」とのことであった。

満蒙開拓青少年義勇軍は、十六歳から十九歳までの青少年を対象に、昭和十三年に設けられ、「青少年義勇軍内地訓練所」に入所したのは、昭和十三年が二四、三六五名、十四年が九、五〇八名、十五年が九、一八二名であった（「満洲開拓事業の進展」「週報」第二二四号、昭和十六年一月二十二日）。

「少國民新聞」の、「こんなことは同開拓民募集を始めてから例がありません」とは、創設以来、予定数を超える応募はなかったからである。

青少年義勇軍は満洲の沃野を心身練磨の大道場として、日満を貫く雄大な皇道精神を鍛錬、陶冶し農道を修練して、民族協和の中核として満洲国の生活発展に寄与すべき開拓民の資質を育成訓練するものとして生れた。（「週報」第二二四号・前出）

「心身練磨の大道場」への憧れが、多くの希望者を生んだのである。そこには、「内地」における手詰まり感が、青少年に、その保護者にあつたとも推測されよう。

「六年生になつて」（東京市大森区東調布第二校六年男子、四月二十日）は、「僕の身は日本人であり、アメリカ人であつた」という、カタカナ名前を持つ児童が「修身や国史並びに新聞を見て、日本の国体がつりつばであることに気がつき、お父さんに日本人としてもらった」というもので、「帝国軍人」になる希望を持っている。母親がアメリカ人であつたということなのであろうが、其の母については触れられていない。

「神社参拝」（北海道恵庭校四年男子、四月二十五日）は、題名が示すように、銃後の児童の務めの一つとされた「神社への清掃・参拝」

が内容。「二月九日、僕等の子供常会に、森末会長さんが神社に近い方は毎日参拝しなさい」といわれたので、「僕は二月十五日からお参りにいかうと思つて五時半頃におきて」家を出た。外は雪がちらちら降って真白だったが、まだ薄暗い中での参拝となつた。

鳥居をくぐつて、境内にのぼり、オーバーをぬぎ、しつかり手をうつつて頭をさげ「天子様をはじめ、日本てい国のばんざいをお祈り申しますと共に父母兄妹の幸をお祈りし、合はせて僕も一生けんめいに、フンパツ致しますことをちかひます」と手をうつつて、境内を降りると、同級生の坂口君も来ました。

北海道の二月は、いうまでもなく厳冬であらう。しかも、夜明け前の、雪がちらつく、薄暗い中での神社への参拝である。「子供常会」の会長は、参拝時間までも指定したのであろうか。まるで我慢大会のようである。

「名誉の旗」（群馬県師範附属校六年男子、五月二日）、「雲」（神奈川県茅ヶ崎第三校六年女子、五月二十二日）、「お父さんのお迎へ」（東京市板橋区板橋第三校五年男子、六月十二日）、この三作品に共通するものは、軍人。内容は、出征兵士と現役将校。

「名誉の旗」は、ある家で「名誉の旗がおちてゐた」のを、拾つて届けたというもの。「どろまみれの旗を見て、見ぬふりをして行つてしまふ。その旗を、足でふんだあともある。なんとといふあさましいことであらう。この家の凱旋した人を、ふみつけるやうなものである」と、この児童は、憤慨している。

「雲」は、「草屋根の家の入団兵の幟が、吹流しの中に中に勢ひよく、きらめいてゐる」というもの。入営の壮行会のものが翻つていうことであらうが、入営してからまだ日が浅いということであらうか。

「お父さんのお迎へ」は、父を迎えに行くバス停に、一人の軍人がバスから降りてくるのを、よく見かける。「大尉で、何時もお父さん

の来る三、四分前に来る」。陸軍省か海軍省か。自宅から定時に通勤する「大尉」は部隊勤務ではなく、役所勤めか。

「帰還」があり、「入営」があり、バス停に「大尉」が降りる。児童の視野に、軍人がいて、軍隊があるということだ。

「春」（北海道白滝校高一女子、六月四日）、「蚕」（埼玉県深谷校四年男子、六月十一日）、この二作品に共通するのは、育てることが「報国」になるということ。

「春」は、兎の世話が内容。朝七時、「私は軍歌を歌ひながら、家へ帰り、早速兎小屋へ行くと、兎達はうれしそうに、青葉をぼり／＼食べてゐた」。「兎が大きくなれば、みんなにおいしい肉をたくさん食べさせられるし、皮は兵隊さんにさせられる」から、兎の世話はいやではなかった、という。

「少國民新聞」第一三三四号（昭和十六年一月四日第二面）は、「報国の埼玉県野本校」の記事を掲載した。兎は、「児童の動物愛護の精神をやしなひ、同時に国策の線に沿う」もので、家や学校での飼育が奨励されていた。兎を育てて売ること、肉の供給ができ、その皮は兵士の防寒具になり、売った代金を貯金させることで政府は戦費を調達できるという仕掛けであった。「兎報国」は、児童の国策への参加であった。

「蚕」は、蚕を育て繭にして売るといふもの。去年、蚕を繭にして売ったところ二つで十五銭になり貯金箱へ入れた。今年も蚕を育てている。「此の蚕一匹でも、お国のお役に立つのだと思つて毎日蚕のせわをして居る」といふもの。「お国のお役に立つ」のは、貯金箱に入れた金は、やがて貯金されるからだ。これは「蚕報国」といふものだ。

「作業の時間」（神奈川県川崎市幸町校四年男子、五月七日）は集団行動の教育実践が内容。「もとは当番と云つてゐたが、今では作業と云つてゐる」清掃が内容。「一年生から六年生まで、全部五時間目にやる」もので、今日の清掃の場所は廊下。皆で、学校全体で、一斉に行う。

「戦時下における児童文化」について（その一三）

「作業」は、清掃を内容とするが、清掃が直接の目的ではない。新潟県南蒲原郡今町小学校高等科二年第十六学級の昭和十四年の「学級経営案」によれば、「協同自治の生活訓練をなし、共存共栄、社会連帯、相敬、犠牲、奉仕等の協同目的の実現につとめ、社会生活の拡充強化を図る」もので、「作業訓練の重視」は、「学級経営案」における「訓練」項目の一つであった。

「花鳥おこし」（北海道上富良野校高一女子、六月二十二日）は、花畑のための土起しに「モンペ」を穿いたが、五年も前には皆笑つたものだが、今は、「皆モンペ姿だ。非常時らしい、よいかつかうだ」といふもの。

第一四半期の「しかられた夜」「ユキ」「消しごむ」に見られた「非常時」や「時局柄」といった認識が、この作品にも見られる。時代が姿を相応しくしている。或は、そうした時代相の下に児童たちの日常があつたということを示している。

「父の手伝ひ」（静岡県高須校六年男子、六月二十六日）には、行動規範に「兵隊さん」が引き合いに出される。父の手伝いで、麦わらを畑にかついで行つた時のことが内容。重そうなので「兵隊さんのことを思つて、思ひきつてしよつた」ところが、割合に軽く感じたとのこと。児童は、戦場に居る「兵隊さん」の苦勞を我が身に引き比べることで苦勞を乗り越えようとした。乗り越えることを大人に求められた結果であり、辛いことは、何時でも、何でも、「兵隊さん」が引き合いに出されたということである。

昭和十六年第二四半期の「綴方」作品に見る時局柄或は「戦時下」色の濃い二〇作品のうちにあつて、特徴的なのは、満蒙開拓青少年義勇軍に関する七つの作品である。このうち六作品は、「少國民新聞」が募集した「義勇軍慰問の作品」で最優秀の拓務大臣賞を受賞したものの。この中には、兄が満洲の義勇軍特別訓練所に入所しているものや父が義勇軍の幹部として、満洲に渡っているものもいた。「御国の為、東亜建設の為に働く」義勇軍への励ましや憧れや賞賛に満ちていた。

時局柄或は「戦時下」色をまとった作品は、第二四半期の「綴方」作品の約二三%に及ぶが、第一四半期同様、残りの七七%は、児童の日常生活に根ざした作品であった。

仲の良かった友達や優しい先生とのお別れ。「卒業、なんていやな言葉でしょう」とする「卒業」（東京市本郷区誠之校六年女子、四月八日）。母が絹糸のような雨だこというと、妹は「豆腐屋さん濡れてくるね」といったという「春雨」（長野県岡谷市田中校五年女子、四月二十七日）。妹の絹糸のような繊細な思い遣りが伝わってくる。

おたまじゃくしを取りに行った。「おたまじゃくしが股の間を通っていた」。追っかけてつかまえると「おおきかつた」とする「おたまじゃくし」（茨城県日立市駒王校四年男子、五月二十五日）。温んだ水に児童の声が弾んでいる。

目を覚ましたら外は雨だった。学校から帰っても雨だ。「そうだ、これから入梅なんだ」とする「雨の日」（埼玉県児玉校六年男子、六月二十八日）。児童は第二四半期の季節の中で暮らしているのである。第一四半期、ご飯を炊いて焦がしてしまった女子児童。第二四半期では、カレーライスを作ったが少しも固まらなかった「失敗」（栃木県柏尾第一校高二女子、五月十一日）。お使用で豆腐を買いに行き、家に着いたとたん落としてしまった「さいごまで注意」（茨城県大生校四年男子、五月二十日）。なんともやり場のない気持ち伝わってくる。

様々な失敗はあるものの、食事の用意に、買い物に、家事を手伝う児童の姿は普遍的であり、「戦時下」故の影はない。

四 昭和十六年第三四半期における「綴方」

第三四半期に掲載された「綴方」は九三作品。この内、作品内容に時局柄或は「戦時下」色に見えるのは、次の三一作品。掲載率からは約三三・三%となる。

「参宮の日」

（東京市荏原区第二延山校六年男子、七月一日・火、第一四八五号）
「聖戦四周年を迎える私たちの覚悟」

（東京市板橋区開進第一校五年男子、七月四日・金、第一四八八号）
「聖戦四周年を迎える私たちの覚悟」

（東京市赤坂区赤坂校六年女子、七月五日・土、第一四八九号）
「聖戦四周年を迎える私たちの覚悟」

（東京市麻布区麻布校四年男子、七月六日・日、第一四九〇号）
「強歩大会」

（神奈川県横浜市平安校三年男子、同前）
「聖戦四周年を迎える私たちの覚悟」

（東京市向島区更正校五年女子、七月八日・火、第一四九一号）
「聖戦四周年を迎える私たちの覚悟」

（神奈川県横浜市戸塚校六年女子、七月十日・木、第一四九三号）
「聖戦四周年を迎える私たちの覚悟」

（千葉県印旛郡成田校高二男子、七月十一日・金、第一四九四号）
「聖戦四周年を迎える私たちの覚悟」

（千葉県山武郡公平村校五年女子、七月十二日・土、第一四九五号）
「聖戦四周年を迎える私たちの覚悟」

（埼玉県北埼玉郡川俣校六年男子、七月十三日・日、第一四九六号）
「聖戦四周年を迎える私たちの覚悟」

（埼玉県大里郡深谷校六年女子、七月十五日・火、第一四九七号）
「聖戦四周年を迎える私たちの覚悟」

（山梨県中巨摩郡藤田校五年男子、七月十六日・水、第一四九八号）
「聖戦四周年を迎える私たちの覚悟」

（山梨県西八代郡市川校四年女子、七月十七日・木、第一四九九号）
「草かき」

（長野県七久保校五年女子、七月二十二日・火、第一五〇三号）
「ぎゆう軍をむかへて」

〔静岡県沼津第二校二年女子、七月二十七日・日、第一五〇八号〕

〔父勇士〕（静岡県三島東校四年男子、七月三十一日・木、第一五一一号）

〔火事〕（秋田県高清水校高一男子、八月二日・土、第一五一三号）

〔るもん袋〕（千葉県飯岡校四年男子、八月五日・火、第一五一五号）

〔勤勞奉仕〕

（神奈川県茅ヶ崎第三校六年男子、八月十三日・水、第一五二二号）

〔私の勤勞記〕（千葉県遠山校高一男子、八月二十日・水、第一五二八号）

〔勤勞〕（北海道月寒校高二男子、八月二十一日・木、第一五二九号）

〔黎明鍊成会〕

（神奈川県茅ヶ崎第三校六年男子、八月二十三日・土、第一五三二号）

〔大掃除〕

（北海道上富良野校高二女子、八月二十八日・木、第一五三五号）

〔ナツヤスミノオモヒデ〕

（山形県酒田市第一校一年男子、八月二十九日・金、第一五三六号）

〔海のたより〕

（東京府八王子市第七校高二男子、八月三十一日・日、第一五三八号）

〔源ちゃんと三輪車〕

（埼玉県児玉校六年男子、九月五日・金、第一五四二号）

〔キモンブン〕

（宮城県細倉校一年女子、九月七日・日、第一五四四号）

〔近づく稲刈〕

（新潟県高士校高二女子、九月十三日・土、第一五四九号）

〔面会〕

（神奈川県茅ヶ崎第三校六年女子、九月二十三日・火、第一五五七号）

〔僕らのかくご〕

（山梨県藤田校四年男子、九月三十日・火、第一五六三号）

この第三四半期における特徴は、「聖戦四周年を迎へる私たちの覚悟」一二作品が掲載されたことにある。この一二作品は、「優等入選者」の作品であり、「少國民新聞」第一四八七号（昭和十六年七月三日）で発表された。

「戦時下における児童文化」について（その一三）

近衛師団と少國民新聞が共同主催で、同師団管下の東京、千葉、埼玉、山梨、神奈川の四府四県の皆さんから募った「聖戦四周年記念綴方」は、前にお知らせしたように、編集部総動員で整理の上、一日午後二時から本社で審査会を開きました。

応募者総数は二千九十八名（一千四十九校）で、「優等入選者」は、東京府四名のほか、神奈川・千葉・埼玉・山梨の各県から二名ずつ計八名であり、全部で十二名が選ばれ、その作品が掲載された。男子女子共各府県で半数ずつが選ばれ、従って、全体でも六名ずつであった。至って、目配り気配りされた選考であったか。

我慢強く、辛抱強く、自分勝手なわがまゝな心を捨てて、先生の教へや、親のいひつけを心から守つて、アメリカやイギリスのために苦しめられたり、だまされたりしてゐる南洋や、支那や、その他、全世界の人々を助け救ふことの出来る大國民になる覚悟を、しっかりと持たなければならぬと思ひます。「天皇陛下の大御心を、世界に広めるための八咫鳥になれ」と言はれた先生のお言葉を、私は一生忘れまいと思つてゐます。

（東京市板橋区開進第一校五年男子、七月四日）

お父様から「日本の戦争は、けつして日本のためばかりではなく、世界の平和のためなのだ」と聞かされました。私達はわがまゝをいつたり、自分ばかりよければいい、というやうな考へを持たないことです。東洋のため、世界のために、戦つてゐる御国の、大きな目的のために、協力しなければなりません。大きな御国の戦争の目的を、よく頭において、どんな小さなことでも、私達に出来ることは実行して、御国のためになる様に、せねばならぬと思ひます。

（東京市赤坂区赤坂校六年女子、七月五日）

日本はなぜ強いのか。それは、天皇陛下の御徳と、兵隊さんの忠勇と、国民の協力一致の、この三つが一つになった偉大な力なのである。戦争はまだ何年続くかわからない。或は僕達第二の国民が、戦線に立つまでつゞくかもしれない。そして僕等は、今よりも、もつとく苦しみをなめなければならぬかもしれない。けれども、どんな事があつても、僕等は負けない。富士山の国、桜の国、此の美しい国を愛する強い気持を、負かすものはないだらう。

(東京市麻布区麻布校四年男子、七月六日)

戦争が始つて、五年です。私達には、何事もお国につくせませんが、日本の子供として、はづかしくない覚悟を持つてゐます。私達は体を丈夫に、兄弟仲よくして、戦地の兵隊さんに慰問の手紙を差上げたり、物を大切に、一生けん命勉強して、一日も早く、世界が平和になるやうに祈つて居ります。

(東京市向島区更正校五年女子、七月八日)

兄は「お前たちみたいに、やせ細で、軍人になれるか。僕位の体格でなければだめだ」といつた。なるほど僕はやせ細だ。一寸がっかりしたが、なにくそこれからだ。今から体をきたへれば、軍人になれるとも、僕はきつとやるぞ、と心の底から強い力がわき起つた。修身の時先生は「これから毎週火曜日には、午前五時半神社に集り、お掃除と参拝と体操をやらう」と言はれた。前の僕なら、「五時半、ねむいな。体操か、いやだなあ」と思ふのだが、真先に喜んだ。(神奈川県藤沢市第二校五年男子、七月九日)

支那事変の始つた時は、まだ私は二年生で、只夢中でちに戦争は終るものだと思つてゐたのでした。しかし戦争はなかく終る所か、大東亜の建設といふ大仕事に、日本は乗り出したのです。まだこれから大変なのだと思ひます。私は女ですから、物を大

事に使ひ、少しでもお国の資源をむだにせずに、いくら戦争が続いても、どんな大仕事に日本が乗り出しても、大丈夫の様に、力をそゝぎたいと思ひます。

(神奈川県横浜市戸塚校六年女子、七月十日)

「義勇軍参加」の私の志望を、父は反対するが、どうしても同意を得なければならぬ。池田君も戸村君も、皆家の人が反対してゐるさうだ。どうして大人がこんな、国家の大事を考へないのか。私達三人は、共に大陸に骨を埋める決心だ。今後は益々心身を鍛錬して、如何なる困難をも突破し得る力を養ひ、敵の戦士として皇運を扶翼し奉る覚悟である。

(千葉県印旛郡成田校高二男子、七月十一日)

もう大きいそがしい田植が始まります。皆で働いて、今年は豊年のしらせを、戦地の兄さんになりたいと思ひます。兄さんの喜んで戦地で働いている姿が目につかびます。「どうぞ神様、兄さんがいつまでも丈夫で、お国の為に御奉公出来ませうに」。私は心でいつもお祈りしてゐます。私も兄さんに負けないで、一生懸命働く覚悟です。(千葉県山武郡公平村校五年女子、七月十二日)

近代戦は国家総力戦で、銃後の国民の心構へが、非常に大切だ。我が村では銃後の護りとして、挙村一致六町歩の荒地を開墾して食糧増産に志し、僕等も仲間に入つて、利根の清い流れを見ながらたくましい体をきたへ、堅忍持久の精神を養ひ、勉強にいそしめるのを思ふ時、川俣村に生まれ、日本国民の一員として育てられた幸福をしみくと感ずるのである。聖戦の最終目的、東亜新秩序の建設をめざす僕の覚悟は、ますます固くなるばかりである。

(埼玉県北埼玉郡川俣校六年男子、七月十三日)

納豆売りをしたお金で、私たち三人は、高崎陸軍病院を慰問しました。日焼けした白衣の兵隊さん達は、非常に喜んでくれました。百年戦ふか、二百年戦ふか、命をお国に捧げて、戦つて居られる戦線の兵隊さんに安心していたゞけるやう、私達は勉強の暇を見て、一生懸命働いてゐます。さうして国民が一つ心になり、一生懸命働いて、一日も早く新東亜を作り上げたいと思ひます。

(埼玉県大里郡深谷校六年女子、七月十五日)

戦地のことは、神の国日本の兵隊さんがきつと勝つて下さる。アメリカがどんなに太平洋でいばつても、きつと日本が撃滅してしまふのだ。しかし戦争は、そとばかりではない。僕等の心が弱かつたら、きつと敵はいつまでも戦つて来るのだ。僕等はりつばな国民になり、国におつただひできるやうに、強い強い体をきたへます。ぐんぐん突き進んで、明るい大きい日本の柱になります。

(山梨県中巨摩郡藤田校五年男子、七月十六日)

天皇陛下の大きい御恩や、兵隊さんのありがたさにたいして、どうしたら御恩がへしが出来るだらうかと考へます。身体を丈夫にうんと勉強して、いつも先生方のおつしやるやうに、国民学校のよい生徒となる事が、第一だと思ひます。先生がおつしやる「よい四年生になることが、皆さんの戦争です」といふお言葉を思ひ出して、世界のどの国の子供にもまけない、四年生にならうと思ひます。

(山梨県西八代郡市川校四年女子、七月十七日)

審査を終つて 近衛師団

四度事変記念日を迎へて、少国民諸君の力強い銃後の決意を聞く事が出来て、頼もしき限りである。いづれも各府県学校の名譽を代表する力作揃ひで、次代を背負ふ少国民諸君の熱と力の誓ひには、一同深く胸を打たれた次第である。作品全般を通じて、良

「戦時下における児童文化」について(その一三)

く時局認識が徹底して居ることを知り得た。中でも少国民としての覚悟、即ち決心決意の程が明快率直にして、趣旨一貫して居る作品は、読んで気持の良いものであつた。高学年の児童が特によく「青少年学徒ニ賜リタル勅語」の精神を具現することに努めつつあるのは宜しい。又生活を通じて自分の覚悟を勇敢に実行しつゝある児童諸君の作品は、特に好感が持てた。

「聖戦四周年記念綴方」の主催者側審査員として、近衛師団からは、情報部長板津直純大佐、同部附黒田朋彦少尉がその任に当たつたことを「少国民新聞」第一四八七号(前出)は伝えている。

「審査を終つて」は、その講評の前半部であるが、「青少年学徒ニ賜リタル勅語」は、昭和十四年五月二十日の「現役将校学校配属令制定十五周年を記念する全国青少年学徒並びに教職員らのご親閲式」が挙行された同日、荒木文相を宮中に召して伝えられた。

国本ニ培ヒ国力ヲ養ヒ以テ国家隆昌ノ氣運ヲ永世ニ維持セムトスル任タル極メテ重ク道タル甚ダ遠シ而シテ其ノ任実ニ繋リテ汝等青少年学徒ノ双肩ニ在リ汝等其レ氣節ヲ尚ビ廉恥ヲ重ンジ古今ノ史実ニ稽ヘ中外ノ事勢ニ鑒ミ其ノ思索ヲ精ニシ其ノ識見ヲ長ジ執ル所中ヲ失ハズ嚮フ所正ヲ謬ラズ各其ノ本分ヲ恪守シ文ヲ修メ武ヲ練リ質実剛健ノ氣風ヲ振勵シ以テ負荷ノ大任ヲ全クセムコトヲ期セヨ

「週報」第一三三七号(昭和十四年五月三十一日)「青少年学徒に勅語を賜ふ」の「勅語」の部分である。「国家隆昌ノ氣運ヲ永世ニ維持セムトスル任」は「汝等青少年学徒ノ双肩ニ在」るから、「文ヲ修メ武ヲ練リ質実剛健ノ氣風ヲ振勵シ以テ負荷ノ大任ヲ全クセムコトヲ期セヨ」とするもの。

「審査を終つて」にいう、「青少年学徒ニ賜リタル勅語」の精神を具

現することに努めつつあるとは、体を鍛えて軍人になるとの覚悟や勉学に東亜新秩序の建設をめざすため身体を鍛錬し勉学に励む覚悟を示している幾つかの作品を指している。

「生活を通じて自分の覚悟を勇敢に実行しつゝある児童諸君の作品は、特に好感が持てた」とあるのは、級友と開墾して「報国農場」を整備し、食糧増産に励む度に「滿蒙の天地を想像」し、「義勇軍参加」の志望を確かなものにしていく千葉県印旛郡成田校高二男子の作品を想定してのことか。

「参宮の日」(東京市荏原区第二延山校六年男子、七月一日)は、伊勢神宮への参拝が内容。外宮では「五穀の神様に、銃後の増産をお祈り」し、内宮では「聖戦四周年、今一番大切な日本の前途を、どうぞお守りください」と祈ったというもの。

「強歩大会」(神奈川県横浜市平安校三年男子、七月六日)は、「戦地の兵隊さん」がキーワード。市民強歩大会でのゴールで、「六十位のおばあさん」に、労いの言葉をかけると、「今頃戦地の兵隊さんは、なんきをして居るだらう。それを思ふと、これくらゐのこと、何でもないと応じたとのこと。老いも若きも、行動規範は「戦地の兵隊さん」ということであった。

「草かき」(長野県七久保校五年女子、七月二十二日)、「勤労奉仕」(神奈川県茅ヶ崎第三校六年男子、八月十三日)、「私の勤労記」(千葉県遠山港高一男子、八月二十日)、「勤労」(北海道月寒校高二男子、八月二十一日)、この四作品は、勤労奉仕が内容。

「草かき」は、「校長先生から増産計画について、村中の畑の草取をしてあげるお話」を聞いた後、「先生を先頭に、草かきを銃のやうにかついで元気よく門を出た」。「草かき」は、児童の戦争ですとでも訓話されたのであろう。

「勤労奉仕」は、「出征軍人遺家族の御宅」への勤労奉仕が内容。奉仕先は「事変勃発後、間もなく応召、上海戦に決死隊となり、戦死された」故内田伍長宅。さつま芋の蔓返しと除草だ。「しぼるやうな玉

の汗」が流れた。

「私の勤労記」は、「農繁休みになつてから四日目だ。何時もより早く起きて、田植の支度にとりかゝつた」と始まる。「田を耕すのも、家の為、自分の為、お国の為と思つて、力を入れて」続けた。

「勤労」は、「朝から大根堀に出かけた」というもの。畑では「子供も大人もせつせと活動してゐる」。畑について「今日も一生懸命に働くぞと心の中でちかつた」。太陽がカンカン照らす下で、懸命に働いた。「頭から流れ出る汗で、シャツが背中にくっついて気が悪い」。腰も痛くなつたが、我慢をして働いた。

「学生生徒児童の集团的勤労作業を拡充強化すること」とは、国民精神総動員委員会が、昭和十四年七月三十一日の第八回総会において決定した「勤労の増進、体力の向上に関する基本方針」の具体的増進方策の一項であった。

しかし、此の方針は、此の時にはじめて検討課題になつたのではなかつたことが、新潟県南蒲原郡今町小学校高等科第二学年第十六学級の「昭和十四年度学級経営案」に見て取れる。ここでは、昭和十四年度の「学級経営案」における「国民精神総動員実施計画と連絡実施事項」において、「実業」の項目で「勤労奉仕、集団作業の重視。戦時に於ける生産力拡充計画、経済統制等に関する理解を深からしむ」とされていた。「学級経営案」の性格上、この教育計画は、十四年度当初には作成されていたと考えられるからである。

「出征軍人遺家族の御宅」への勤労奉仕は、「学生生徒児童の集团的勤労作業を拡充強化する」方針に沿つた銃後の児童の「勤労報国」の一環であつたが、ここに加えて農繁期における勤労奉仕が設定されることになつた。

「少国民新聞」第一三四四号(昭和十六年一月十六日二面)に、「戦時食糧の増産で少国民にも召集令」のリードで、次の記事が掲載された。

大政翼賛会では十四日、全国道府県の農務課長や農会幹事、衛生課長をまねき、農林、文部、厚生各省からも関係局部長が出席して、戦時食糧確保協議会を開きました。その結果、手不足でお米や雑穀の増産が思ふやうに行かぬ農村へ、今年からは田植の五、六月ごろと、とりいれ時の十月など農家の急がしい時、四年生以上の全小学生徒をはじめ、中等学校生徒、専門学校生徒、大学生を、授業を休ませ、本式に農村へ手伝ひに出動させることになりました。

「近づく稲刈」（新潟県高士校高二女子、九月十三日）は、稲刈りが近づき「国の増産を図り、立派に農村の務めを全うするため、今年はいつよりも、うんと働かう」というもの。

田植えや大根の収穫、稲刈りなどへの児童の勤労奉仕は、「少国民」に対する食糧増産への「召集令」の発動であり、児童の労働力を当てにせざるを得ない状況になってきたということの表れだ。

「ぎゆう軍をむかへて」（静岡県沼津第二校二年女子、七月二十七日）は、「まんもつかいたくぎゆう軍の方々が、沼津へ来たのです」というもの。満洲へ渡る途中で、沼津で、民家に宿泊するのだという。行列の中には「白いきれを首にかけて、小さな木の箱をかゝへた人が来ました。ぎゆう軍の中の人になくなって、おこつて一しよにまんしうへ行くのださうです」。

訓練中に亡くなった人の遺骨を運ぶ隊員がいたということであるが、将に「骨を満洲に埋める」ということ。

「父勇士」（静岡県三島東校四年男子、七月三十一日）、「面会」（神奈川県茅ヶ崎第三校六年女子、九月二十三日）、「僕らのかくご」（山梨県藤田校四年男子、九月三十日）、この三作品に共通するのは、「父親」。

「父勇士」は、「父が帰還してからは、僕は、いつも父に付いて廻ります」という作品。父は「武漢攻略戦」に参加していたという。武漢

「戦時下における児童文化」について（その一三）

攻略は、昭和十三年六月十五日、大本営の御前会議で決定され、十月二十七日に攻略したことが大本営から発表された。児童の父もこの作戦に参加し、生き残って帰還したということになる。

「面会」の父は、国内の駐屯地の兵舎にいた。溜まった話で二時間ほどの面会時間は終ってしまった。帰り際、父は私に「お父さんはお国の為に戦死しても、お前はしつかりして、立派な人になっておくれ」と小声で言った。三人姉弟の長女である私に、父は事後を託したのである。

「僕らのかくご」には、「僕のお父さんは軍人にならないので、まったくざんねんです」の一節がある。此の間は「隣の裕雄さんが、勇ましく出征しました」。「軍人」にならないことは、言ってみれば肩身が狭いといった風潮になっていたということである。

「火事」（秋田県高清水校高一男子、八月二日）、「大掃除」（北海道上富良野校高二女子、八月二十八日）、この二作品の底にあるのは、非常時における地域の目といったもの。

「火事」は、こんなに火事が多いということは、「日本にとつて非常に心細いことで、秋田県の恥、ひいてはお国の恥だ」というもの。火事が「恥だ」とは、緊張が足りないとの非難であろうか。非常時の心構えへの戒めであろう。

「大掃除」には、「きれいにしないと、赤紙をはりつけられると考へると又恥づかしくなつて、一生懸命仕事をした」という一節がある。個別的な各家庭の大掃除が集落の中で監視されることになったということだ。

「るもん袋」（千葉県飯岡校四年男子、八月五日）、「キモンブン」（宮城県細倉校一年女子、九月七日）、この二つの作品のキーワードは、文字通り慰問。慰問袋と中に入れる慰問文だ。

「るもん袋」は、「一組二つづつ、るもん袋をつくつて、兵隊さんに送つて上げることになりました」という校長先生の指示で慰問袋を作るといふもの。「家へかへつて、はみがき、せきけんなど、戦地から

帰った人にきいた、ふそくなものを、たくさん集めました」。この慰問袋はもう戦地の兵隊さんに届いたかどうかと返事を心待ちにしている。

「キモンブン」は、「センチハ、コレカラハ ダンダン、サムクナル デセウネ。ワタシタチノ タメ ホンタウニ ゴクラウサマ デス」という慰問文。強い、優しい日本の兵隊さんの「ゴブウンヨ オイノリ イタシマス」と結ぶもので、一年生にも慰問文作成が要請されたということである。

「黎明錬成会」(神奈川県茅ヶ崎第三校六年男子、八月二十三日)、「ナツヤスミノオモヒデ」(山形県酒田市第一校一年男子、八月二十九日)、「海のたより」(東京都八王子市第七校高二男子、八月三十一日)、この三作品のキーワードは、夏休み。

「黎明錬成会」は、家を午前三時半に出て、茅ヶ崎海岸で午前四時半から錬成会が開かれた時のこと。集合すると、暁天遙拝、明治天皇の御製朗誦、建国体操と続き、波の音に負けるなど元気に愛国行進曲を歌い終わると高等科は出漁準備にかかった。「黎明錬成会」は、夏の心身鍛錬の一環だった。

「ナツヤスミノオモヒデ」には、「ナツハ、タンレンキ ナノデ オヤスミノ ウチ、カラダヲ キタヘテ、ゲンキヨク アソビマシタ」とある。夏休みではない。夏の鍛錬期間なのである。

「海のたより」は、叔父さん宛の「逗子の海からのお便り」。午前中は勉強で、午後は水泳で、「私と同じ少国民が、たくさんいます。時局柄いゝと思ひます」。夏の海水浴は、レジャーではなく心身鍛錬であった。

夏は心身を鍛錬するに最もふさはしい時期である。野に山に河に海に、大自然の懐に最も人間の素朴純粹の姿で突入し、炎天下に汗を流し皮膚を赤銅色にして、心ゆくまで心身を錬磨するのは夏でなくてはならぬ。夏こそは心身を鍛錬する絶好の機会である。

厚生省「夏と心身鍛錬」(週報「第一四五号・昭和十四年七月二十六日」)の一節である。心身鍛錬は、国民の体力向上を目指した国家的な要請であった。

「源ちゃん」と三輪車(埼玉県児玉校六年男子、九月五日)の「源ちゃん」は、四歳。「タンク」もあるが、三輪車ばかり乗っている。おばさんが「源は今に、兵隊さんになるのだらう。タンクに乗るけれども、しなさいね」というと、源ちゃんは、「タンク」はひっくり返るから嫌だという。男の子は四歳にして、将来は「兵隊さん」になることを摺り込まれていく。

昭和十六年第三四半期の「綴方」作品に見る特徴は、時局柄或は「戦時下」色の濃い作品が三一作品、掲載率で三三・三%を占めることである。また、三一作品のうちにあつて、特徴的なのは、近衛師団と少國民新聞社共同主催による「聖戦四周年記念綴方」であり、一二作品が最優秀作品に選ばれ、順次掲載に至ったもので、時局柄或は「戦時下」色の濃い作品の約四割に達した。

「聖戦四周年を迎へる私たちの覚悟」は、「支那事変」の四周年に際し、近衛師団の管下にある五府県の児童が、「銃後の決意」(審査を終つて)前出)を綴り、「覚悟」を披瀝した作品であるが、それ以外では、児童による勤勞奉仕を内容とする作品が目立った。十六年一月、大政翼賛会は、食糧増産のための働き手として、児童にも目をつけ、農繁期休暇を設定した。ここには、汗を流し、足腰の痛みを耐えて勤勞奉仕に励む児童の姿があつた。

戦地から帰還した父にべったりくっついて離れない男子児童がいた一方、兵舎に面会にいった長女の児童は、これから戦地に赴くであろう父から、戦死後の家族を託された。また、父が「軍人」にならないから残念と嘆く児童もいた。「戦時下」における父親と児童との諸相がここにあつた。

時局柄或は「戦時下」色をまとつた作品は、第二四半期の「綴方」

作品の約三三・三％に及ぶが、第一、第二四半期同様、残りの六六・七％は、児童の日常生活に根ざした作品であった。

蛙を取りに行き、田んぼに足を取られながら、やっと一匹を捕まえたという「蛙取り」(茨城県日立市駒王校四年男子、七月八日)。

ほたるをつかまえて、籠にいれ、蚊帳にはいつて見ているうち眠ってしまい、翌朝見ると、ほたるは死んでいたという「ほたる」。(長野県宮田校二年男子、八月一日)

朝は清々しい風。昼はものすごく盛り上がった入道雲。夕方は夕日が熟したトマトのように真赤になって沈んでいったという「夏の一日」。(千葉県飯岡校高一男子、九月三日)

すっかり秋めいて、涼しい朝だ。田んぼ道へ行ったら稲の穂が小波のように、朝風にゆれているという「秋」。(秋田県能代市向能代校高一男子、九月二十八日)

第三四半期の季節柄を内容とする作品であり、児童は、足裏で、目で、夏を味わい、朝風で秋の到来を感じ取っていた。

母さんに寝たまま食べると牛になるといわれたが、その通り、牛になる夢をみてしまい、これからはお母さんの言うことを聞こうと決心したとする「夢」(神奈川県青野原校五年男子、七月二十九日)。なんともユーモアにあふれた作品である。

蜘蛛は天気予報ができる。雨の降る日には網を張らない。大風には嚴重に張る。音楽もすきだという「蜘蛛」(栃木県大田原校五年女子、八月二十六日)。観察力も忍耐力もある児童もいたということである。

五 昭和十六年第四四半期における「綴方」

第四四半期に掲載された「綴方」は四六作品。この内、作品内容に時局柄或は「戦時下」色の見えるのは、次の二二作品。掲載率からは約四七・八％となる。

「我は海の子」 (宮城県石巻校四年男子、十月三日・金、第一五六六号)
「自転車の衝突」 (東京市大森区東調布第二校六年男子、十月四日・土、第一五六七号)

「私の弟」 (東京市王子区王子第四校三年女子、十月十二日・日、第一五七四号)

「蝗取り」 (茨城県香澄第一校六年男子、十月十九日・日、第一五七九号)
「バラオからの初放送」 (東京市大森区東調布第二校六年男子、十月二十四日・金、第一五八三号)

「蟻の行方」 (東京府八王子市第七校高二男子、十月二十六日・日、第一五八五号)

「しげんくわいしう」 (静岡県大宮校二年男子、十月三十一日・金、第一五八九号)
「早起会」 (山梨県八代校六年男子、十一月六日・木、第一五九四号)

「満洲の兄さんへ」 (茨城県日立市駒王校四年男子、十一月十三日・木、第一六〇〇号)

「映画 “航空基地” をみて 空軍の任務」 (東京市中野区江古田校六年男子、十一月二十日・木、第一六〇六号)

「映画 “航空基地” をみて 決死の爆撃」 (東京市中野区桃園校五年男子、十一月二十三日・日、第一六〇九号)

「映画 “航空基地” をみて 一機足りない」 (東京市中野区中野本郷校六年女子、十一月二十七日・木、第一六一二号)

「映画 “航空基地” をみて 日本魂の尊さ」 (東京市浅草区新堀校六年男子、十一月三十日・日、第一六一五号)

「映画 “航空基地” をみて 嘘のない映画」 (東京市中野区東中野校六年女子、十二月四日・木、第一六一八号)

「日・米英戦と私の覚悟 大決戦の時」 (東京市荏原区旗台校三年女子、十二月十四日・日、第一六一七号)

「大東亜戦争と私の覚悟 断じて勝たう」 (東京市麻布区筭校六年男子、十二月十七日・水、第一六一九号)

「大東亜戦争と私の覚悟 いまのきもち」

(東京府武蔵野第三校二年女子、十二月十九日・金、第一六三二号)

「大東亜戦争と私の覚悟 いざ突進」

(東京市番町校六年男子、十二月二十一日・日、第一六三三号)

「大東亜戦争と私の覚悟 世界一強い」

(東京市小石川区駕籠町校二年男子、十二月二十四日・水、第一六三五号)

「大東亜戦争と私の覚悟 ゆだんするな」

(東京市麻布区筈校三年女子、十二月二十六日・金、第一六三七号)

「大東亜戦争と私の覚悟 がんばりませう」

(東京市浅草区浅草校三年男子、十二月二十八日・日、第一六三九号)

「大東亜戦争と私の覚悟 アジヤの夜明」

(東京市大森区小池校六年男子、十二月三十一日・水、第一六四一号)

この第四四半期における特徴は、十二月八日に「帝国・米英に宣戦」(「少国民新聞」第一六二二号・昭和十六年十二月九日)の結果、「大東亜戦争」が始まり、それゆえの「大東亜戦争と私の覚悟」八作品が掲載されたことにある。

「大決戦の時」

(東京市荏原区旗台校三年女子、十二月十四日)

「断じて勝たう」

(東京市麻布区筈校六年男子、十二月十七日)

「いまのきもち」

(東京府武蔵野第三校二年女子、十二月十九日)

「いざ突進」

(東京市番町校六年男子、十二月二十一日)

「世界一強い」

(東京市小石川区駕籠町校二年男子、十二月二十四日)

「ゆだんするな」

(東京市麻布区筈校三年女子、十二月二十六日)

「がんばりませう」

(東京市浅草区浅草校三年男子、十二月二十八日)

「アジヤの夜明」

(東京市大森区小池校六年男子、十二月三十一日)

「大決戦の時」は、次のように始まる。

十二月八日、よく晴れて冷える朝でした。

校長先生から「いよいよ日本は、米・英と戦争することになりました」とお話がありました。とうとう大決戦の日が来たかと、私は何か体が寒いやうで、がた／＼してたまりませんでした。憎い英国、無礼な米国を、今こそ思ひきり泥まみれにたたきつけて、二度と立てないやうにする時が来たのです。(略)

アジヤにまことの平和をきづくため、十何万もの兵隊さんをなくした支那事変から、手を引くなどと、今さらどうして出来ませう。支那では私の優しい叔父さん二人も戦死してをります。(略)戦争が長びいてどんなつらい事があらうとも、歯を食ひしぼつて我慢ませう。そして、どこまでも兵隊さんを信じ、力の限りお手伝ひ致します。貯金、けん金、神社祈願、誓の家奉仕、慰問袋、廃品回収、空地の開こん、警報伝達、家のお使ひ、あゝ、もつと私達のする仕事はないでせうか。

この児童の「覚悟」の根本には、二人叔父が戦死したのは米国が「支那」に造ってやった弾丸だ、との思いがあり、開戦はその敵討ちとでもいうものであった。

また、この文面には、銃後の児童のなすべき仕事のほぼ全てが挙げられている。「貯金、けん金、神社祈願、誓の家奉仕、慰問袋、廃品回収、空地の開こん、警報伝達、家のお使ひ」。時局柄或は「戦時下」の色濃い内容を持った作品の背景が、ここにあった。

「日・米英戦と私の覚悟」の総題は、十二月十七日掲載から「大東亜戦争と私の覚悟」となった。米・英戦を「支那事変」も含めて「大東亜戦争」と呼称することを閣議で決定したのが、十二月十二日で、その決定によるものであろう。

「断じて勝たう」における「私の覚悟」は、次のようなもの。

少国民の僕達は、戦争に出たい気持は心にみなぎつてゐるが、

まだ小さいのでそれは出来ない。そこで学校で勉強に運動に
め励んでやがてお役に立つやうに、今から一生懸命にやらねば
ならぬ。

先述した「青少年学徒二賜フ勅語」に沿った「覚悟」であり、「此
の戦争が長期戦となる事は、予期しなければならぬ。その為には、
物資不足も当然である。しかし僕達は決して物資が不足したからとい
つて、不平をいふ事は断じてならない」と強い「覚悟」を示した。

「いまのきもち」における「私の覚悟」は、健気だ。

私のいのちをなくしても、日本のお国がまだまだながくつづい
て、天子さまも、御ぶじでいらつしやれば、それでいゝと思ひま
す。日本のお国はまけられません。おくわしなにかたべられなく
ても、新しいきものなんかきられなくても、私はがんばります。

いわゆる「国体の本義」であるが、二年生にこのことが理解できた
ということより、自分の命より「天子さま」が大切であるとの教育的
指導の成果と見るべきであろう。

「いざ突進」では、「覚悟」を次のように記した。

此の一戦こそ正に皇国の興廢の分岐点である。我等の覚悟はす
でに開戦当初に決してゐる。我等第二の国民は、一層自分の本分
を尽くし銃後を護らねばならぬ。我等は身体は小さくとも、一人
前の日本魂は持つてゐる。大東亜建設と世界平和に向かつて、い
ざ突進しようではないか。

ここでの「覚悟」も、「断じて勝たう」と同じく「青少年学徒二賜
フ勅語」に沿ったものといえる。開戦は「東洋の平和を、否世界の平
和を求める我等日本国民」が「堪忍袋の緒を切つて、世界平和の敵征

「戦時下における児童文化」について（その一三）

伐に討つて出た」ものであるという。

「世界一強い」における「覚悟」は、「ぼくたち少国民は、からだを
強くし、一生けんめいべんきやうして、強い国民になり、戦地で
はたらいていらつしやる兵たいさんにまけない、世界一強い子供にな
らうと思つてをります」というもの。

「ゆだんするな」では、日本が勝ち続けているので「とてもうれし
い」が、「でもゆだんは出来ません」と「覚悟」を語る。

「がんばりませう」の「覚悟」は、「いくらてきのひかうきが来て、
せういだんをおとしても、一けんもくわじをおこさず、けしとめよう」
というもの。空襲の可能性までは否定していなかったということであ
ろう。

「アジアの夜明」は、「米英をアジアから追払つて、奴隷の取扱ひに
喘いでゐるアジア十億の民を救ふことこそ、日本の使命」とし、次の
ように「覚悟」を披瀝する。

たとへ日本が空襲にさらされ、米一粒も無い日が来ようとも、
銃後はきつと僕等で引受けます。大君のため、神州のため、断じ
てこゝを護ります。僕等は必死の覚悟です。

「大君」と「神州」を「空襲にさらされ、米一粒も無い日が来よう
とも」必死の覚悟で護るとの決意であったが、歴史がそのように動い
て行つたとは、児童は、この段階で知る由もないのはいうまでもない。
「大東亜戦争と私の覚悟」において、開戦の理由を、それまでの忍
耐の堪忍袋の緒を切つた為としたのは、「大決戦の時」「断じて勝たう」
「いざ突進」の三作品。

「アジアの夜明」では、開戦の理由を、白人支配のアジアの開放を
めざして、「日本がアジアに真の平和をきつき、有色人種の共栄圏を
つくる」と見た英米が、その邪魔をしようとして対日包囲網を敷いたこと
に対する開戦とした。日本による大東亜共栄圏と英米の権益の衝突と

みる観点が記され、六年生の理解力に脱帽。

第四半期の「綴方」作品には、「大東亜戦争」勃発以前に特集を組んだ「映画『航空基地』を見て」がある。この特集について、「少國民新聞」第一六〇六号（昭和十六年十一月二十日）は、次のように紹介した。

東京日日新聞社の映画部が「航空日」を記念して作製した映画「航空基地」は、勇ましい荒鷲の活躍ぶりを、銃後の国民に伝へてゐます。この間の少國民新聞紙上でお知らせしたやうに、帝都の国民学校の皆さんをお招きして、この「航空基地」の鑑賞会を毎日開きました。これを見た方々から、感激の綴方が、編集部に山のやうに送られて来ましたので、その中から代表的な作品を連載して、「航空基地」をまだ見ない方々にその感激をお分ち致しませう。

特集「映画『航空基地』を見て」は、次の五作品。

- 「空軍の任務」 (東京市中野区江古田校六年男子、十一月二十日)
- 「決死の爆撃」 (東京市中野区桃園校五年男子、十一月二十三日)
- 「一機足りない」 (東京市中野区中野本郷校六年女子、十一月二十七日)
- 「日本魂の尊さ」 (東京市浅草区新堀校六年男子、十一月三十日)
- 「嘘のない映画」 (東京市中野区東中野校六年女子、十二月四日)

「空軍の任務」は、飛行機の任務は敵を撃滅するだけだと思つてたが、友軍の地上部隊の困つてゐるのを、偵察機がいち早く見つけて、食料を投下することもあることを覚えた、とする。それにも増しての感動は、「地上整備員の苦心」だった。夜昼なしに機の手入れに尽くし、途中で万一故障でも出来てはという心で、一心に尽くすのを目の当たりに見て、「かげにもあんな重大な務めがある」ことを知った。

「決死の爆撃」では、飛行士はみな「決死の覚悟で、勇ましい門出」をし、後に残った整備兵たちは何時までも見送つて「今日の武運を祈つていた」。飛行機は爆撃に行くばかりでなく、味方の陣地に食糧弾を投下する仕事もある。整備兵のご苦労は「勝利のかけにかくれた勇士である」ことを知った。

「一機足りない」も、整備兵がたった一本の懐中電灯を頼りに修繕や整備に「わづかの睡眠もとらず、真心こめて働いて」いることに感激したという。爆撃を終えて帰り、一機足りなかつた時、部隊長をはじめ、整備員など、全員が「どうか無事で帰つて来る様にと、心の中で祈りながら」立っている姿からは、お互いが「兄弟よりもつと信じ合つて」いる様子が伝わってき、だから「日本はいつも強いのだ」と思う。

「日本魂の尊さ」においても、「飛行機に一つの故障もないやうにと、不眠の努力を続けてゐる整備員があつてこそ、飛行機は自由に戦へる」と記す。此の映画を見て「これからの大空は、僕達がしつかり護らなければならぬ」と覚悟し、「りつぱに御国に御奉公する事を、かたくちはねばならない」とした。

「嘘のない映画」では、「一番私の心をとらへたのは、帰らぬ戦友を待つ画面だつた。夕暮が次第に迫つて来る基地には、何となくものしいうれひの影が、次第に濃くなつて来る」と、帰還を待ち侘びる兵士の心境を画面が映し出していることを伝えた。「戦友愛、部隊長の親心、さうしたものがこの映画の元となるのだらう」と分析し、急降下爆撃は大変よく写されたとは思つたが、「最後はどうなるのか見えたかつた」と、急降下から反転急上昇する画面への期待を記していた。

「映画『航空基地』を見て」は、何れもが、爆撃だけが飛行機の任務ではないこと、整備兵の苦勞と重要性を記す結果となつた。

「我は海の子」(宮城県石巻校四年男子、十月三日)は、男児の海軍志願が内容。大きくなつたら、海軍に入り、「双眼鏡を手を持つて、司令塔に上り、我が日本の国を守るのだ。そして世界の国々に、日本

の海軍の強さを、しめしてやるんだ」と気概を示す。年齢相応の海軍への憧れが溢れている。

「自転車の衝突」(東京市大森区東調布第二校六年男子、十月四日)は、「銃後の手本」が内容。自転車同士が出会い頭に衝突した。二人とも血気盛んな青年だから、喧嘩になるかと思っていたら、お互い相手に詫びを言って、喧嘩にならなかった。僕は「こんな人が銃後国民の手本ともいふべき人であらう」と思ったというものであるが、この児童の周りには、こうした人物がそれまで居なかったということか。

「私の弟」(東京市王子区王子第四校三年女子、十月十二日)の内容は、四歳の弟のこと。絵を描くことが好きで、「お手本をみないで書けるのは、日の丸の旗だけでしたが、このあひだ、お母さんから軍艦旗をならひました」というもの。「日の丸」や「軍艦旗」が、四歳の幼児の絵柄ということ。「日の丸」は出征見送りなどで慣れていたということであろうか。何れにせよ、幼児の絵柄としては「戦時下」ゆえということになる。

「蝗取り」(茨城県香澄第一校六年男子、十月十九日)は、学校で蝗取に行ったというもの。「この蝗を売ったお金は、慰問袋となり、戦地に送られるのだ」という。蝗は稲にとっての害虫であるが、佃煮にするために買い取ってくれるのであった。

「パラオからの初放送」(東京市大森区東調布第二校六年男子、十月二十四日)の内容も、題名通り。「小さい時からパラオで育った僕には、なつかしい歌」が聞えてきた。パラオで放送している会場は映画館。父も「会場で此の放送を聞いてゐるであらう」とする。児童は日本に帰ってきたが、父はまだパラオ在住ということだ。

横浜―サイパン―パラオ間に定期航空路が開設されたのは、昭和十五年(一九四〇)三月六日。パラオ島に電話が開通したのは、昭和十六年(一九四一)五月十三日。

「少国民新聞」第一四一三号(昭和十六年四月八日)は、「町田校の津山先生が南洋パラオ島へ」のリードで、次のような記事を掲載した。

「戦時下における児童文化」について(その一三)

東京府下町田国民学校の津山健吉先生はこんど南の国、南洋パラオ第二国民学校の先生になりました。近く家族連れで出発します。先生は南方開拓にうんと頑張りますとはり切つてゐます。

昭和十年(一九三五)パラオ諸島の日本人は六、五五三名であったという(「南進日本と委任統治領」『昭和5』前出)。児童の父もその一人であり、国民学校も必要とされたことである。日本の「南方経営」が進展して行く中に、児童も生活していたということだ。

「蟻の行方」(東京府八王子市第七校高二男子、十月二十六日)は、人間の世界に色々な出来事があるように、「蟻の世界にもなにかあるだらうか。戦争も、いやそれから学校も」という内容。蟻の世界に「戦争も」あるだらうかとの思いが「戦時下」なのである。

「しげんくわいしう」(静岡県大宮校二年男子、十月三十一日)は、先生が「あしたの日曜日は、しげんくわいしゆうをしなさい」と言ったので、川に行ってみた。「くぎだの、はりがねだの、サイダーの口がねだの、たくさん落ちてゐました」。児童は、身近な場所で「資源回収」に励むことを余儀なくされたが、それら鉄製品は戦争には無くてもならないものであり、眠らせておける資源ではなかった。

「少国民新聞」は、第一四〇九号(昭和十六年四月二日二面)に、「鉄、銅の自給自足へ」の記事を掲載した。

戦時下にくらあつてもたりない鉄と銅を国内だけで間に合わせるため、政府では一日から、まっお役所や公共団体から鉄製品、銅製品をとり外して回収することになりました。

兵器を造るためには、鉄鋼を造る必要があるが、屑鉄の輸出国であったアメリカは、昭和十五年(一九四〇)一月五日に輸出国の増加を理由に一九四〇年度分の屑鉄・錫の対日輸出割当てを半減すると発表した(『昭和5』前出)。

さらに、同年七月二十五日、アメリカ大統領は、輸出管理法による輸出許可制適用品目に屑鉄・石油などを追加指定した（『昭和5』前出）。

これを受けて『週報』第二一六号（昭和十五年十一月二十七日）は、「米国の屑鉄禁輸と日本製鉄業」において、「日本を困らせる心算で、日本に売つてやらぬといひ出した」のであるが、この際、「米国が禁輸をした」のだとの消極的な見方を捨てて、日本が米国屑鉄の「輸入を禁止した」との意気を持つべきだとした。その上で、次のように、国民に呼びかけた。

我々日本国民は何国の厄介にもならず「自らの力」で、何を措いても先づ「鉄」を国の必要とするだけ、鉱石から造り出す責務があると云うことを夢寝の間にも忘れずに、国民は一致協力前進しようではないか。

今から見れば、「鉱石から造り出す責務がある」との背景には、南方資源の開発という思惑があった訳だが、おいそれと出来ることではなかったことは理解していたと思われる。

「少國民新聞」は、先ほどの引用部に続けて、政府は「昭和十七年になれば鉄の自給自足ができ、銅も困らないだけの見込はついてゐますが、こゝしばらくの間だけ、急場の間には合わせるため、企画院の中央資源回収協議会で、全国各府県に手伝はせて古鉄、古銅を集めることにしました」とし、まずは、各役所の靴拭き、自転車置場、扇風機、鉄製灰皿、鉄柵、鎖、塀、鉄門などを取り外して回収することとした。児童の「しげんくわいしう」は、こうした屑鉄集めの一環の、最も外周における回収作業であったといえる。

「早起会」（山梨県八代校六年男子、十一月六日）は、「毎週月曜日に氏神様の庭掃除」をするもの。「前稿」で触れたが、前年の十五年第四四半期にも「まだうすぐらい道をほうきをついで、姉ちゃんとお宮のさうじにゆきました」とする綴方作品があった。「早起会」の児童は、寒いので行くのをよそうと思つたが、兵隊さんのことが浮かび、直ぐに考え直して出かけた。朝、五時過ぎ。東の空が明るくなり、雀が鳴きだした頃、掃除は終つた。寒いので行くのをよそうという自然な内発的感情は、「兵隊さん」という行為行動の規範に打ち負かされたということか。

「満洲の兄さんへ」（茨城県日立市駒王校四年男子、十一月十三日）は、満洲に居る兄に宛てた手紙。学校で運動会があったこと、父が兄が帰ってくればにぎやかにすると独り言を言っていることを知らせ、「僕は元気で兄さんのかへつてくるのを待つてゐます」と結ぶ。「兄さん」がなぜ、満洲にいるのかは不明であるが、今は、満洲にいる。父も僕も、帰ってきてほしいのだ。

昭和十六年第四四半期の「綴方」作品に見る特徴は、時局柄或は「戦時下」色の濃い作品が二三作品あったこと。この四半期、「綴方」の掲載作品数が四六作品であったから、その掲載率は四七・八％を占めたことになる。これまでにない掲載率であった。

また、二二作品のうちにあつて、特徴的なのは、「大東亜戦争と私の覚悟」の八作品。十二月八日の真珠湾攻撃に始まる米英への宣戦布告で、「大東亜戦争」と呼称されることになった大規模な戦闘への「覚悟」を内容とするものであった。

それでも、過半数は児童の日常生活に根ざした作品ということになるが、第四四半期の季節柄の作品としては、次のような作品があった。美しい夕焼雲はあちらこちらに散らばつて、空をいろどっている。田舎に生れた生甲斐をつくづく感じた「夕焼雲」（埼玉県玉川校高二男子、十月七日）。

学校から帰って田んぼに行った。稲刈りだった。がんばったら日のあるうちに刈り終わった「稲刈」（千葉県前林校高一男子、十月二十五日）。

弟がとんぼをつかまえた。私を振り返って、にこにここと笑った「弟ととんぼ」(北海道網走女子校五年女子、十二月十日)。

児童の視線は、美しい夕焼雲を追いかけ、トンボを追いかけける弟をたどり、笑顔をとらえた。また、児童の体力は農作業で発揮され、もう立派な働き手だ。

六 昭和十六年「綴方」作品の概括

第一四半期における「綴方」作品に見る時局柄或は「戦時下」の状況は、兄弟の入営であり、「非常時」の自覚を求められる日常であった。その日常には、高射砲が、戦闘機が、戦車が児童の身近に迫り、代用品が、切符制が生活の基盤となっていた。

時局柄或は「戦時下」色をまとった作品は、第一四半期の「綴方」作品の二〇%を超え、少なくない掲載率であるが、一方、約八割は、児童の日常生活に根ざした作品であった。

北海道の児童は、雪国の冬籠りを「格別の味わい」と楽しみ、東京の児童は焼き芋で喜んだり、焚き火をして、霜の融ける体験をした。何れも、第一四半期の季節柄の作品である。

朝ごはんを焦がして涙をこぼした少女、妹を負って遊ぶ少女。家事に子守に、少女達は、一家を切り盛りする一員だった。

第二四半期の「綴方」作品では、満蒙開拓青少年義勇軍に関する七作品が特徴をなしている。満洲の義勇軍特別訓練所に、兄が入所している児童、父が幹部として赴任している児童がいた。満洲における食糧増産に励み、「御国の為、東亜建設の為に働く」義勇軍への励みや憧れや賞賛が、それらの作品には満ちていた。

時局柄或は「戦時下」色をまとった作品は、第二四半期の「綴方」作品の約二三%に及ぶが、第一四半期同様、残りの七七%は、児童の日常生活に根ざした作品であった。

春雨に豆腐屋さんが濡れるのを気にかける妹、初夏の田んぼにオタ

「戦時下における児童文化」について(その一三)

マジックシを追いかけける児童、雨・雨・雨に入梅を実感する児童。児童は第二四半期の季節の中で暮らしていた。

カレーライスが固まらなかつた児童、買った豆腐を家について落としてしまった児童。食事の用意に、買い物に、様々な失敗はあるものの、家事を手伝う児童の姿は普遍的であり、「戦時下」故の影はない。

第三四半期の「綴方」作品に見る特徴は、十二編の「聖戦四周年記念綴方」・「聖戦四周年を迎える私たちの覚悟」にある。「支那事変」は、七月七日であり、第三四半期ゆえに掲載された。「銃後の決意」を綴り、「覚悟」を披瀝した作品である。勤労奉仕を内容とする作品も目立った。児童は食糧増産のための働き手として、大政翼賛会に目をつけられ、汗を流し、足腰の痛みに耐えて勤労奉仕に励む児童の姿があった。

戦地から帰還した父に付きまとう男子、面会した父から戦死後の家族を託された女子、「軍人」にならない父を嘆く児童。「戦時下」における父親と児童との諸相がここにあった。

時局柄或は「戦時下」色をまとった作品は、約三三・三%に及ぶが、残りの六六・七%は、児童の日常生活に根ざした作品であった。

田んぼで足を取られながら、蛙をやっと一匹を捕まえた児童、螢を籠にいれ蚊帳の中で見ているうち眠ってしまった児童、清々しい風、盛り上がった入道雲、熟したトマトのような夕日。児童の「夏の一日」は賑やかだ。秋、児童は、稲穂が朝風にゆれているのを見た。第三四半期の季節柄を内容とする作品であり、児童は、足裏で、目で、夏を味わい、皮膚で、朝風の秋の到来を感じ取っていた。

牛になる夢をみた児童、蜘蛛は天気予報ができると観察する児童。児童には、ユーモアがあり、観察力も忍耐力もあった。

第四四半期の「綴方」作品に見る特徴は、「大東亜戦争」勃発による「大東亜戦争と私の覚悟」の八作品と「映画『航空基地』を見て」の五作品があること。前者も後者も、その題名通りを内容とする作品。前者は、「大東亜戦争」が、十二月八日に勃発したことから、この第

四四半期に掲載され、特徴となった。

時局柄或は「戦時下」色の濃い作品が二二作品あったことも特徴。四半期、「綴方」の掲載作品数は四六作品であったから、その掲載率は四七・八％。これまでにない高い掲載率であった。

それでも、過半数は児童の日常生活に根ざした作品であった。美しい夕焼雲に生甲斐を感じる児童、稲刈りにがんばる児童、とんぼをつかまえた弟は笑顔を姉に向けた。四四半期の季節の中で、児童の視線は、美しい夕焼雲を追いかけ、トンボを追いかけ、弟をたどり、笑顔を捕らえた。児童の体力は稲刈りで発揮された。もう立派な働き手だ。

以上、「綴方」の位相と展開について、昭和十六年第一四半期から第四四半期までを概括してみたが、「少國民新聞」には、昭和十六年第四四半期に大きな転機が襲いかかった。新聞用紙節約の為、十月から、通常四面構成が週一回二面建てになり、十一月からはそれが週二回となり、十二月からは三回となった。

言うまでも無く、紙面減は、児童の投稿作品に影響を与えることとなった。前年第四四半期の「綴方」作品は、九二作品が掲載されたが、十六年第四四半期の掲載数は四六作品であり、半減した。

前年十五年と十六年の「綴方」について、掲載数と時局柄或は「戦時下」色を持った作品の掲載率について、整理しておく。

「十五年」

- 第一四半期六二作品中一三（約二〇・九％）
- 第二四半期七七作品中一四（約一八・一％）
- 第三四半期八二作品中一一（約一三・四％）
- 第四四半期九二作品中二三（二五・〇％）

「十六年」

- 第一四半期七六作品中一六（約二一・一％）
- 第二四半期八七作品中二〇（約二二・九％）
- 第三四半期八一作品中三一（約三三・三％）
- 第四四半期四六作品中二二（約四七・八％）

十五年と比較して見ると、十六年は、第一四半期から第二四半期にかけて、何れも十五年の掲載数を上回り、「戦時下」色を持った作品の掲載率についても、上昇している。

しかし、十六年の第三四半期は、掲載数では十五年第三四半期とほぼ同数ながら、「戦時下」色を持った作品の掲載率は、第四四半期同様、ほぼ倍増したことになる。

これが、十六年の特徴であり、第三、四四半期における特徴であった。特に、第四四半期は、紙面構成の減少による掲載作品数の減少があるにも係わらず、時局柄或は「戦時下」色を持った作品がほぼ倍増し、掲載率も当然のことながら連動することになった。その背景は、偏に十二月八日の「大東亜戦争」の勃発であったといえよう。

(二〇〇七・一一・五)